

Alphonse Mucha Museum News

堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館



アルフォンス・ミュシャ
《花》1897年
リトグラフ、紙

Contents

vol.4

展示報告 (2014年3月 — 2015年2月)

作品紹介

イベントレポート

作品修復報告

学芸員コラム vol.4

ミュシャ館インフォメーション

お蔵出し ミュシャ・コレクション

2014年3月15日(土)ー2014年7月6日(日)

堺市が所蔵するミュシャの作品約460点とその周辺作家の作品約30点は、「カメラのドイ」で知られる株式会社ドイの創業者、土居君雄氏(1926-1990)が収集した「ドイ・コレクション」が前身となっています。土居氏はアンティーク・カメラやクラシック・カーなどの収集でも知られますが、ミュシャ作品の収集のきっかけは、海外出張の際にアンティーク・ポスターを購入したことでした。本展ではコレクションの成り立ちや特徴に焦点を当て、コレクションの目玉となる作品だけでなく、これまでの展覧会では展示される機会の少なかった作品も含めてご紹介しました。

「ドイ・コレクション」は土居氏が約30年にわたって収集したもので、スイスの収集家ヴォルフガング・スヴァテックのコレクション約120点を加えたかたちで堺市に寄贈され現在に至ります。その数、質ともに世界でも有数のもので、有名なポスターや装飾パネルはもちろん、絵画、彫刻、素描、書籍、宝飾品などミュシャの多岐にわたる創作活動をうかがい知ることができる点が特徴です。ミュシャはフランス・アメリカ・チェコなどの国々を舞台にさまざまな作品を制作しています。ミュシャが有名になるきっかけとなった女優サラ・ベルナルのポスターをはじめとした華やかなリトグラフ、下絵や習作など直筆の作品、ミュシャの祖国チェコでも鑑賞することのできる大型の油彩画など、ミュシャの生涯の画業をたどることのできるこれらの作品は、ミュシャの息子イジー・ムハ(シリ・ミュシャ、1915-1991)の協力を得て収集されました。

また、コレクションにはアール・ヌーヴォーやアール・デコの時代に活躍したミュシャ以外の画家の作品も含まれています。

ミュシャ・スタイル

2014年7月12日(土)ー2014年11月9日(日)

芸術家はそれぞれ独自の創造性をもってその個性を発揮しますが、ミュシャの場合はとくに、ポスターや装飾パネルなどのグラフィック作品に通底する「型」から画風を定義されていると言えます。それは「ミュシャ・スタイル」と呼ばれ、彼の活躍した19世紀末のパリでは、ひとつの流行として追随者や模倣作品を生み出すことともなりました。本展覧会では、68点の作品を展示し、アルフォンス・ミュシャによってあらわされた「ミュシャ・スタイル」に注目しました。

ミュシャはポスターデザイナーになる以前、舞台装飾の工房で働いたり、貴族の邸宅の室内装飾を手がけたり、アカデミーと呼ばれた画塾で伝統的な西洋美術の技術を学んだりとさまざまな経験を積んでいます。その頃の作風と「ミュシャ・スタイル」とはかなり印象が異なります。グラフィック・デザインに関してミュシャは独学で学ばざるを得なかったため、当時既に存在していた作品や理論を参考にしていたと考えられますが、様式が形成された経緯はいまだ謎に包まれています。



これらの多くもミュシャのポスターと同じようにリトグラフという版画技法によって制作され、当時のパリの街を彩りました。この時代は、資本主義経済の成長や印刷技術の発達などによってさまざまな商品を宣伝するポスターの需要が増し、多くのポスター作家が登場します。ジュール・シェレやウジェーヌ・グラッセなどポスターの隆盛に関わる作家たちが頭角を現し、新たな表現方法としてポスター制作に着手する画家も現れました。これらミュシャ以外の作家の作品は、ゆくゆくはミュシャ専門の美術館を建設したいと願った土居氏が、ミュシャの作品や活動を語る上で必要な関連資料として収集したものです。

このように系統立てて収集されたコレクションは土居氏の没後、ご遺族から堺市へ寄贈されました。土居夫妻がかつて新婚時代を過ごした思い出の地である堺にやってきたコレクションは、1994年から「ポルタス堺 アルフォンス・ミュシャ・ギャラリー」(南海電気鉄道堺駅前。現在は閉館)にて展示されました。そして2000年4月より、現在の「堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館」での展示が始まったのです。(M.I)

第1章、第2章では、突然完成形として世に現れた「ミュシャ・スタイル」が、具体的にはどのようなものであったかということを中心にモチーフと構成の面から検証しました。「スタイル」の作品には、女性・植物・曲線・装飾のモチーフが多く描かれています。これらはそれぞれ、アカデミーで身につけたデッサン技術や、ポスターの仕事の請け負うようになってから学んだ二次元的なデザインの実用、異国の文化や自然から取り入れた要素などが絡み合いながら生成されています。写実的な人物(おもに女性)を中心に、反復する植物などの装飾文様や、曲線と余白を生かした枠が1つ1つのパーツとして画面を彩り、平面的な部分と立体的な部分がだまし絵のような効果を生みながら巧みに構成されていることがわかります。

第3章では、晩年期にあたる作品から、「ミュシャ・スタイル」の展開についてご覧いただきました。ミュシャは1900年頃から商業美術の世界から離れ、祖国チェコで活動するようになります。愛国や人類の平和、愛といったテーマを油彩画で表現し始めると同時に、「ミュシャ・スタイル」にも変化が見られます。限定的に行うようになっていたポスターなどのデザインには「スタイル」の要素が含まれているものの、民族衣装やスラヴを象徴するモチーフが取り入れられ、シンプルな構成によ

て力強い訴えかけが感じられます。視覚的な心地よさや純粋な美しさを追求した「ミュシャ・スタイル」は、チェコ人としての「アルフォンス・ムハ」の思いと相まって、新たなスタイルへと昇華されていきました。

私たちがミュシャの作品を認識する際のアイデンティティとなっている「ミュシャ・スタイル」は、ミュシャがデザイナーとしての類まれな才能をもって築き上げた様式です。しかしそれは型抜きのように杓子定規に表現されるものではなく、個々の作品で実にさまざまな様相を呈します。ミュシャの作品が今もなお人々を惹きつける魅力は、ここにあるのかも知れません。(A.O.)



ミュシャが彩る物語

2014年11月15日(土) - 2015年2月28日(土)

ミュシャはその画業のなかで、挿絵やポスター、油彩画などの多様な媒体を通して「物語」を描き出しています。本展覧会では、物語とミュシャの関わりについて注目し、文学や史実に基づく86点の作品を、ストーリーとともに紹介しました。

第1章では、ミュシャの原点ともいえる初期の挿絵作品をご覧ください。パリでアカデミーに通うも、経済的な理由でやむなく挿絵の仕事をはじめたミュシャ。ジャーナリズムの発達により当時さかんに出版されていた新聞や週刊誌には、挿絵が入られるようになり、多くの人々の娯楽となっていました。この頃のミュシャの挿絵作品は、いわゆる「ミュシャ・スタイル」とは異なりデザイン的要素が見られず、物語の内容を忠実に再現した写実的な画風で描かれています。無名のイラストレーターでしかなかったミュシャですが、挿絵の仕事は次第に増え、一定の評価を得るまでになりました。

ミュシャにとって転機となったのは、女優サラ・ベルナルの演劇のポスターを手がけたことでした。ポスターデザイナーとしてのデビュー作であったにもかかわらず、パリの人々やサラ本人から高い評価を受け、ミュシャは一躍名を馳せることとなります。第2章では、そのような出会いを経て生まれたサラ・ベルナルのポスターや演劇に関する資料を展示しました。街ゆく人の目を引き、物語の内容を知らない人にもその世界観を瞬時に印象付けなければならないポスターという媒体の役割を、ミュシャは大胆な構図や余白とのバランス、装飾デザインによって達成しています。

第3章では、デザイナーになってからますます発展していった挿絵作品について見ていきました。初期の作風の延長上にあった叙事的な描写には次第にデザイン的要素が加えられ、物語を直接描くだけでなく象徴や隠喩を含むモチーフを装飾文様として用いることも行っています。特にミュシャの挿絵作品の粹と言える『トリポリの姫君イルゼ』や『主の祈り』では、幻想的な挿絵が豪華な装飾とともに描かれており、物語を補助するという挿絵の機能を超えて、多様なイメージ、造形



の面白さによって読者を楽しませる工夫がなされています。

また現実にはありえないファンタジーの世界だけでなく、過去に起こった出来事を紡いだ「歴史」も物語のひとつと言えます。第4章では、歴史という物語に対するミュシャの表現と思いに触れました。西洋美術の伝統において、ギリシャ・ローマの古代世界や聖書の記述、歴史上の事件について描いた作品は歴史画と呼ばれ、絵画のヒエラルキーのなかで最も格の高い画題として位置付けられていました。本来そのような格調高い絵画を描く巨匠となるべくアカデミーで学んでいたミュシャにとって、歴史を表現することは芸術家としてのプライドを刺激されるものだったと考えられます。1900年のパリ万国博覧会でボスニア・ヘルツェゴヴィナ館壁画を担当したミュシャは、同国を取材し、その歴史を描いたことで、自身の祖国や民族への思いを掻き立てられ、パリを離れることを決意します。晩年の大作《スラヴ叙事詩》はまさに、スラヴ人の芸術家としてミュシャが心身を捧げた、壮大な物語でした。(A.O.)

『白い象の伝説』

1894年 書籍 315×228×20mm



1893年9月から1894年1月まで『ル・プチ・フランス・イリュストレ』にて連載され、その後アルマン・コラン社から書籍として出版された。初版が好評を博し、1900年に再版されている。父テオフィル・ゴートエの文学サロンのなかで育った著者のジュディット・ゴートエは、東洋の文化に関心を持ち、和歌のフランス語翻訳にも取り組んだ文筆家である。

本作ではインドとシャムを舞台に、白い象がたどる数奇な運命を精緻な情景描写とともに書き上げている。内容に合わせ、ミュシャは異国風の植物や衣装、建築物を丁寧に描いている。画風は初期の写実性をあらわしているが、背景を円や四角で囲むなどデザイン的な要素も見られる。

ミュシャが高く評価したピエール・ルティという挿絵画家が各章のタイトル装飾を担当している。象徴的なモチーフを用いたデザインは、のちのミュシャ・スタイルに現れる装飾性の源泉のひとつとなっていると言われる。(A.O.)

民衆美術協会

1897年
リトグラフ、紙
619×450mm



本作はその名の通り、「民衆美術協会」という組織のためのポスターである。民衆美術協会というのは1894年にパリの法律家エドモン・ブノワ＝レヴィによって設立された組織で、民衆に芸術を広めることを目的としていた。また、若い芸術家を援助することも活動の目的の一つであったらしく、作品を買い取って協会承認の印を押すこともあったという。描かれている女性は芸術の寓意像で、スライド映写を用いて青年に芸術の手ほどきをしている。女性の頭上、アーチ状の部分に書かれたフランス語は「スライド映写によって人々にもたらされる芸術」という意味を持っている。

ミュシャはこの組織の一員であり、裕福な人々だけでなく一般の人々にも芸術を楽しんでほしいと願っていたようだ。パリでの活動の中で安価に求められる作品の依頼を多く引き受けたのはこのような考え方の影響があるのだろう。このポスターが制作された1897年、民衆美術協会は7,000人ものが員が所属する大きな組織に成長している。(M.I.)

果物(左)

1897年 リトグラフ、紙 663×454mm

花(右)

1897年 リトグラフ、紙 657×443mm

自然の恵みをテーマにした2点の連作。個人の家庭で楽しむことができる装飾パネルである。ミュシャの作品のなかでは装飾が少なく、比較的シンプルな構成であるが、上部の丸みを帯びた三角形のモチーフがアクセントとなっている（よく見ると異なる植物デザインが施されている）。花で髪を飾った女性はそれぞれ、タイトルとなっている果物と花を胸に抱えており、体の向きや髪の色が対照的になるよう工夫されている。《果物》の女性の腕輪に見られる渦巻き模様、《花》の女性の袖に見られる刺繍やレースには、ミュシャの祖国チェコにちなんだ意匠が取り入れられている。(A.O.)



ワークショップ「やってみよう!キッチンリトグラフ」

2014年9月28日(日) 14:00~16:00

ミュシャのポスターや装飾パネルを鑑賞する際、技法の欄に「リトグラフ」と記載されているのを見たことがある方も多いのではないのでしょうか。リトグラフは水と油が反発する作用を利用して印刷する版画技法の一種です。本来リトグラフ制作には特殊な材料と膨大な作業時間が必要となります。しかし、フランスの美術教師の女性によって発明された「キッチンリトグラフ」という技法を使うと、身の回りにあるもので簡易的にリトグラフを体験することができるのです。まずアルミホイルにオリーブオイルで絵を描き、コーラをかけます。すると、化学反応により絵を描いた部分は油を吸着しやすくなり、それ以外の部分は水分を含みやすい性質に変化します。そこで版を湿らせて油性のインクを乗せると、絵を描いた部分のみにインクが付きます。



当日は参加者同士で作品の感想を伝え合うなど交流も生まれる中、個性豊かな作品が誕生しました。「リトグラフのしくみが理解できた。」「身近なものでできて楽しい!」といったご感想もいただき、あまり馴染みのない「リトグラフ」という技法を身近に感じ、理解していただけたのではないかと思います。(M.I.)



講演会「本の歴史 クーテンベルクからアルフォンス・ミュシャまで」

2015年1月25日(日) 14:30~16:00

企画展「ミュシャが彩る物語」関連イベントとして、講演会を開催しました。講師はNPO法人「書物の歴史と保存修復に関する研究会」代表理事の板倉正子さん。ミュシャが活躍した19世紀末に至るまでのヨーロッパにおける書物という媒体に関して、歴史や保存修復の見地からお話しいただきました。

書物は、紙の発明、印刷技術の発達、読書文化の土壌、挿絵表現の多様性といったさまざまな要因が複雑に絡み合い発展してきた文明のひとつと言えます。西洋では特に、キリスト教の聖書を手書きで写した装飾写本を起源に、複製技術や製紙技術が発達していきました。

リトグラフという版画技法や安価な紙の生産なくしては生まれえなかったであろうミュシャの挿絵作品やポスター。

描かれた内容や表現に注目しがちな美術作品ですが、その媒体や技術の側面から捉えることで、新たな発見が得られたのではないのでしょうか。(A.O.)



2014年度

作品名	制作年	技法・材質	修復後寸法(タテ×ヨコ)	処置内容	委託先
メディア	1898年	リトグラフ、紙	2075×765	乾式清掃、裏打ちの除去、全体水洗、裂けの繕い、再裏打ちと作品固定、額・アクリルパネル新調	山領絵画修復工房
自力皿(ブラハ市民会館市長ホール壁画)の習作	1911年頃	木炭、パステル、紙	540×482	台紙の軽減、糊離れによる浮きの修正、ドライプレス、インレイ、額加工、パネル新調	山領絵画修復工房

※作品寸法の単位はmm。

『トリポリの姫君イルゼ』にみるミュシャ・デザインの極致

ホスターや装飾パネルの作品がよく知られるミュシャだが、『トリポリの姫君イルゼ』（原題 *Ilseé, Princesse de Tripoli*、以下「イルゼ」）は彼の独創性が遺憾なく発揮された挿絵本である。本作はエドモン・ロスタン（1868—1918）によるサラ・ベルナールのための戯曲「遠国の姫君」（原題 *La Princesse Loiraie*、初演は1896年）をもとに、当時弱冠25歳のロベール・フレール（1872—1927）が著したもので、メランコリックな吟遊詩人ジョフレが幻の美女イルゼに恋い焦がれる物語。252部限定で出版された富裕層向けの豪華書籍で、ミュシャによる挿絵が全てのページに描かれている。羊皮紙とサテン地に1部ずつ、和紙と中国紙に35部ずつ、残り180部がウェラムに似せた紙に刷られ、そのなかでも印刷の状態や使用したインクによって細かく値段が分けられていた。フランス語版ののちドイツ語版、チェコ語版も発行されているが、限定部数発行のため石版は印刷後に処分されている。

ミュシャがこの作品を制作したのは1897年。装飾芸術家として最も多忙な時期であり、またその独特の画風「ミュシャ・スタイル」の代表作が多く生まれた頃である。活動初期に挿絵画家としてのキャリアを築いたミュシャは、デザイナーの仕事を受け負うようになってからも挿絵作品を手掛け、双方で得た経験を生かしながら創作に取り組んでいた。「イルゼ」は初期の挿絵作品にはなかった装飾デザインや象徴的なモチーフによって頁が構築されており、物語の理解を促す叙述的な表現だけでなく、鑑賞物として目を惹きつける工夫がなされていることがわかる。例えば39ページはジョフレが妹と夕暮れの湖で語り合う場面だが、文字と情景描写の間には、水辺に生える植物だろうか、蠢くような茎と根を持つ株と、丘に沈む太陽が、抽象化したパターン文様の帯となって挿入されている。また、表紙も含め全ページに登場する針金のような組紐装飾が興味深い。ミュシャの挿絵にたびたび現れる素材であるが、特にこの「イルゼ」においては、全体を囲む枠や挿絵とテキ

ストを分割する境界線として画面を整理する役割を果たしたり、それ自体が特定のモチーフになって主張を強めたりと、その表現は一つとして同じものがない。

補助的な挿絵のあり方を超越した「イルゼ」の豊かな装飾性、デザイン性は、中世の彩飾写本に通ずるものがある（同じく装飾性の高い1899年の『主の祈り』はまさにミュシャの宗教的思想を反映した挿絵本である）。それは近代社会のなかで失われた大衆の審美眼を養うという、イギリスのウィリアム・モリス（1834—1896）やミュシャのライバルともされたウジェーヌ・グラーセ（1845—1917）のブック・デザインの理念の流れを汲みながらも、純粹に形態の美しさやリズム感、視覚に働きかける効果を目指した結果として生まれたものでもあるだろう。

また、アール・ヌーヴォー様式の代名詞ともなった「ミュシャ・スタイル」の大きな特徴の一つは、写実的な表現と抽象的な表現が違和感なく共存している点にある。この「イルゼ」においても、二次元的な装飾デザインが写実的に描かれた登場人物や背景と化学反応を起こし、1冊のオブジェを完成させるとともに、感覚的に物語に埋没していくような読書体験を提

供している。（A.O.）



アルフォンス・ミュシャ『トリポリの姫君イルゼ』（仏語版）表紙（上）と39ページ（下）1897年 書籍

供している。（A.O.）

ミュシャ館インフォメーション

与謝野晶子文芸館移設とアルフォンス・ミュシャ館リニューアルオープン

1994年から2000年まではポルタス・センタービルの「与謝野晶子ギャラリー アルフォンス・ミュシャギャラリー 堺」において、2000年からは当堺市立文化館に併設され、約20年間ともに歩んできたアルフォンス・ミュシャ館と与謝野晶子文芸館。晶子館は2015年2月をもって閉館し、「与謝野晶子記念館」と館名を改め、3月20日にオープンする「さかい利品の杜」に移設します。それにとりも改装工事のため、ミュシャ館は2015年3月は休館し、4月7日にリニューアルオープンいたします。ご迷惑をおかけしますが、ご理解・ご協力のほどお願い申し上げます。

堺の文化発信の拠点として新たに誕生するさかい利品の杜、そして堺市立文化館アルフォンス・ミュシャ館を今後ともよろしく願っています。（A.O.）



さかい利品の杜 外観イメージ

堺市立文化館 アルフォンス・ミュシャ館

観覧料	一般 500円	高校・大学生 300円	小・中学生 100円
開館時間	9時30分—17時15分（入館は16時30分まで）		
休館日	月曜日（休日の場合は開館）、休日の翌日（翌日が土・日・休日の場合は開館） 年末年始、展示替期間		
交通	JR阪和線「堺市」駅下車徒歩約3分 JR快速にて・大阪から約25分・天王寺から約8分・和歌山から約50分・関西国際空港から約45分		

590-0014 大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ヘルマージュ堺式番館
TEL:072-222-5533 FAX:072-222-6833
http://mucha.sakai-bunshin.com

